
お店の前にいた猫

個体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お店の前にいた猫

【Nコード】

N3837F

【作者名】

個体

【あらすじ】

お店の前に猫がいたその猫と自分を考える

お店の前に自転車を止めた。その時、ふと小さなものが目に入った。

それは一匹の白黒の猫。

ギリギリのところで自転車はストップ。猫と眼が合う。

「……」

「……」

猫は逃げない。なかなか人なつこい猫だなと微笑みがこぼれてしまった。

お店の用の方が優先だったので、猫と顔を合わせる時間はそこまです。さつさと傘をたたんで入口まで行く。

店から出て自転車の所まで戻ると、猫は初めて会った場所から動いてない。

この時再び眼を合わせることになる―よく見ると、顔が結構汚れている。野良なのか。そこのお店で世話になっているのか―汚れ方から前者なのかなと思った。

「……」

季節は冬。ミズレがちらついている。

でも、毛に覆われているから人間より温いのかねえ？ などとにやりと笑って猫を見る。また眼が合う。見事に眼が合うものだからまるで、何かを訴えられているように錯覚する。

「寒いねえ。寒いよ」

息は白く、空は真っ暗。さつさと帰ればいいのに、なぜか帰らずそこにいた。

わずか一分にも満たない出会いだが、この猫に愛着を持ってしまうった。

幸薄そうなところが自分みたいで、なんか共感できた。

はあ…買ったばかりの肉まんはいつも暖かいが、心はいつも寒い。

でも、今この時は傍に自分みたいなヤツがいて暖かい気がするよ。
「……」

ん？ こっちがそう思っているだけで、この猫は実は幸せだった
りするんだろうか？

「まあ……いいや」

誰にも聞こえないくらいの声でそうつぶやいて猫にこう言った。
「お互いがんばろうな」

しんしんと降るミズレの中、自転車を走らせていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3837f/>

お店の前にいた猫

2010年10月26日13時47分発行